

3. バリアフリー杉デッキ歩道の活用について

視覚障がい者の外出支援策として開発研究されています、「バリアフリー杉デッキ歩道」について質問します。

私の地元福岡市南区の喫茶店経営の視覚障がい者の方の紹介で、九州大学キャンパスを訪れました。九州大学キャンパスバリアフリー検討研究会の羽野 暁（はの さとし）特任助教より「バリアフリー杉デッキ歩道」の実験現場で説明を受けました。



羽野先生から、視覚障がい者は日常生活において聴覚を重要なコミュニケーションツールとしている。さらに、周囲の環境をより確実に識別するため白杖でたたいて音を出し、視覚障がい者誘導ブロックを軽く踏んで歩かれている。

視覚障がい者が安全に単独歩行するための最も大きな情報源は、視覚障がい者誘導用ブロックです。現在では公共空間に広く普及し、視覚障がい者の歩行を支援しています。

しかし、視覚障がい者誘導ブロックは、線の幅が細いため、いったん逸れると最悪の場合車道に飛び出す可能性があります。「視覚障がい者は30センチほどの細い線上の誘導ブロックから逸れ易く、誘導用ブロックの敷設だけでは視覚障がい者の安全な単独歩行に対する支援は十分ではない。」との説明に誘導用ブロックで事足りると思いついていた健常者である私たちには大変ショッキングな説明でした。

早速、アスファルト舗装部とスギ板舗装部を二分した延長18mの試験歩道の現場で、白杖を使って歩いてみました。アスファルトの歩道とスギ板歩道の違いは、アスファルト舗装では、車道に逸れても白杖でたたき音は同じで、聞き分けができませんが、杉デッキ歩道を歩行した際は、車道に逸れた場合に音の違いがはっきりしていました。まさに一目瞭然ではなく、「一聞瞭然」でした。

10代から70代の白杖を用いて単独歩行が可能な視覚障がい者の方42名に、すでに実験していただいたそうです。実験結果は、アスファルト舗装では7名の方が車道に飛び出した。しかし、スギ板舗装ではゼロ名でした。

因みに木製バリアフリー歩道の構造は、板は、幹径が 50 センチ以上の建築材には不適な杉・檜を使用し、同大学で開発した防腐処理技術を使い、根太には、ペットボトルのキャップを主原料にした再生材を使用しています。耐久年数は、約 20 年から 25 年であり、一般的なアスファルト舗装やインターロッキング舗装が 5 年程度で補修が必要になることに比べて耐久性も優ります。

そこで知事に質問です。

今述べたことは、聞いただけでは、理解しがたいと思います。「百聞は一見に如かず」この杉デッキは、SDGs 達成への貢献でもあります。是非この実験現場の視察をお願いしたい。その上で、視覚障がい者が多く通行する道路への活用を検討してはいかがでしょうか。お答えください。

【服部知事の答弁】

視覚障がい者が多く通行する道路における「バリアフリー杉デッキ歩道」の活用について

県管理道路は、「福岡県高齢者、障害者等の円滑化の促進に係る道路の構造に関する基準を定める条例」に基づき、歩道の舗装や勾配、視覚障がい者誘導用ブロックなどを整備することにより、視覚に障がいのある方の通行に配慮しています。

「バリアフリー杉デッキ歩道」を道路に活用するにあたっては、先ほど申し上げた構造基準を遵守した上で、車道からの乗入部における段差や沈下などに対する耐久性や構造の検証、各種障がい者団体等との協議などを行う必要があります。

このため、先行事例などについて情報収集しながら、導入にあたっての課題について、研究していく必要があります。

県としては、今回ご提案いただいた工法も含め、新しい技術についても研究を進めながら、引き続き、障がいのある方に優しい道路整備に取り組んでまいります。